主筆　牧野富太郎
植物研究雜誌　第七卷　第八號（通卷第六十八號）
昭和六年（1931）九月三十日
東京　津村研究所發行

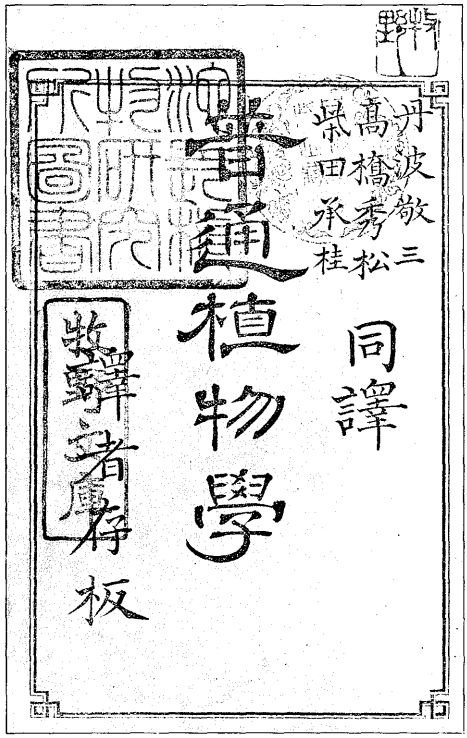
○植物學術語ト明治十四年開版ノ『普通植物學』

牧野富太郎

植物學ノ術語(Technical terms)ニハ我邦今日普通一般ニ使用シテヰルモノト醫學藥學ノ方デ使用シテヰルモノトノ兩樣ガアッテ併立シ同ジOvaryデモ一方デハ子房ト云ヒ一方デハ實礎ト呼ンデヰテ兩方其譯語ガ違ッテヰル、先年高木藥學士ハ此兩樣アルノニ就テ大ニ之レヲ慨カレ當時ノ『藥業週報』誌上デ之レヲ論ゼラタ事ガアッタト記憶スルガ其後尙依然トシテ舊態ガ其マヽニ繼イテ今日ニ及ンデヰル、其レデ中等學校デ教育ヲ受ケタ人々ガ醫學藥學方面ノ學校ヘ入學シ來ルト忽チ其レ迄教ハッテ來タモノヲ放棄シテオイテ復ビ更ニ新規蒔直シニ新タナ術語ヲ覺エネバナラヌノデ大ニ困ルト云フ事デアル、其レハサウデ實際閉口スルデアラウ、此ノ實ハつまらぬ困却事件ヲ除イテ學生ヲ救ヲ爲メニ何トカ良イ工夫ハナイモノカ、局ニ當ル先生達ノ御一考ヲ煩ハシタイト思ッテヰル、私ノ考ヘデハ醫學藥學ノ方ノ方々ガ學問上ノ事柄統一ノ爲メ又困ッテ居ル學生ヲ救フ意味デ從來ノ封建的ノ固執カラ離レテ大ニ雅量ヲ見セ因襲的ノ特例ヲ廢シテ普通一般ニ疾クヨリ廣ク使用シツヽアルモノニ從フヤウニセバ此困却事ハ立ドコロニ救ハレル譯デ何ンデモナイ事デアル、其何ンデモナイ事ガ何時マデモ何時マデモ續イテ誰レ一人其改善ヲ企テル人ノナイノハ實ニ不思議デアル、習慣ハ中々破リ難イモノト見エル、斯界ニハ尖端ヲ歩ム一流ノ學者モ多クアルノニ此レハ亦何事ゾヤト歎カズニハヰラレナイ、何時マデモ把持シ又固執シオカネバナラヌ程ノ好術語即チ良譯字トモ思ハレナイモノヲのっぴきならぬはめニシテ置イ

テアルカラ學生ハ止ムヲ得ズ一度デ濟ム處ヲ二重ニ勉强シテ覺エネバナラヌ事トナッテヰル、成ルベク時間ヲ節約シ成ルベク冗ヲ省イテ能率ヲ擧ゲネバナラヌト絶叫スル輿論ノ行ハルヽ現代ニハ此二重教育ハはやらぬ譯ダ、私ハ其犧牲トナッテ居ル若イ學生ガかはいさうデナラナイ、狹イ日本ノ內ダ此ンナつまらぬ事ハ早ク思ヒ切テ一途ニシテシマイタイガ此レハ誰レデモ同感デアラウト思フ、然シ此鐵壁ハ中々他カラハ破リ難イカラ城ノ方カラ自發的ニ開門ガ願ヒタイ、學問統一、學生救濟ノ旗ヲ立テヽ、サウスレバ見上ゲタモノダ

サテ何時頃カラ醫學藥學ノ方面デ其ノヤウニ譯シタ術語ヲ常用スル事ニナッタカ其レハ蓋シ今カラ五十年モ前ノ明治十四年ニ淵源スル、卽チ同年九月ニ創メテ開版トナッタ『普通植物學』ニ瞞マルト思フ、此書ハ丹波敬三（東京大學助敎）高橋秀松（製藥士）幷ニ柴田承桂（柴田桂太博士ノ嚴父）三氏ノ同譯ニ成ッタ一書（洋紙、活版刷、四六版、約三百頁）デ今其書ノ「例言」ニ據レバ獨逸國カルヽスルーヘ府ノ百工學校植物學敎授理學博士モーリッス、ゾイベルト氏著ノ『グルンドリッス、デル、ボタニーク』（植物學概論）ト云フ書ヲ譯述シ多少之レヲ增刪セル者デアル、次デ其翌年卽チ明治十五年八月ニ其第二版ヲ發行シ次ニ又其翌年卽チ明治十六年十月ニ其第三版ヲ發行シ



『普通植物學』第三版ノ扉（縮小）
蓋シ初版ノ扉モ同樣ノ扉デアラウ

タモノデ發兌書肆ハ東京馬喰町二丁目ノ島村利助幷ニ同日本橋通三丁目丸屋善七デアッタ（上ノ『普通植物學』ニ對シ同型ノ書デ丹波敬三、柴田承桂兩氏同譯、高松數馬氏補輯ノ『普通動物學』一冊ノ姉妹書ガアル）

右ノ『普通植物學』ノ書中目次ノ大綱ハ次ノ如クデアル（第三版本ニ據ル）

植物學ノ本旨及ビ分類

植物通論

第一章　植物器官學

〔甲〕植物器官學及ビ生活學總論

〔乙〕植物器官學各論

第一款……第十二款ニ至ル

第二章　植物解剖學

第一款……第三款ニ至ル

第三章　植物生理學

第一款……第二款ニ至ル

植物各論

第一章　植物記載學及ビ植物綱目學

第一款……第二款ニ至ル　其他

第二章　重要ノ植物科及ビ屬

自然系統分類ノ通覽

第一類……第五類ニ至ル

第三章　植物地理學

其レカラ術語ノ下ニハ原語ガ括弧内ニ容レテアルノデ對照ニ便デアル、今其一二ノ例ヲ擧グレバ卽チ本根（Radix primaria）、扁匙狀葉（Fol. spathulatum）、四長雄蘂（Stamina tetragynania）、粉囊（Anthera）、纖維組織

(Prosenchyma)、卵子 (Ovulum s. gemmula)、實礎 (Ovarium)、胎芽 (Embryo)、擬果 (Fructus sprius)、石果 (Drupa)、果粥 (Pulpa)、芽胞房 (Sporangium)、芽宮 (Apothecia) 等ノ如キデアル

當時植物界ノ耆宿デアッタ伊藤圭介先生ガ自筆デ其題言ヲ書イテヰラレルガ其文章ハ卽チ次ノ如クデアル、此時先生ノ齡ハ正ニ七十九歲デアラレタ

普通植物學題言

一我邦古來所謂本草者流ハ、各種ノ草木ヲ博采シ、ソノ葉莖花實ヲ辨別シ和漢ノ名稱ヲ多識スルヲ專門ノ業トス、亦務メタリト謂ベシ、卽チ分類ノ植學ニ屬シ、先哲ノ著書多シト雖ドモ、概シテ皆是ナリ、而ルニソノ植物ノ內景諸部ヲ解剖シ、ソノ功用ヲ辨晰スルモノハ殆ンド稀ナリ」

一又植學ヲ主張シ、洋書ヲ譯述シ、普通ノ性質功用ヲ講習スル者、近來ノ上梓頗ル多シ、未ダソノ全備ノ好書ヲ觀ズト雖ドモ、ソノ厚志最嘉稱スベシ、而ルニ其譯者自ラ植物ヲ精研セズ、徒ニ紙上ニ就テ、之ヲ編述スルノミニシテ、和產實物ニ据テ、彼是比較シ、ソノ徵證ヲ鑒訂精定スル者、今亦稀ナルガ如シ」

一斯ノ如キハ、共ニ植學域中ノ缺事ニシテ、完全集成ノ業ト賞スルコト能ハズ、豈亦隔靴ノ遺憾ト謂ハザル可ンヲ乎、近日丹波、高橋、柴田ノ三氏合著ノ植學書ヲ閱スルニ、其論說ノ精覈ノミナラズ、其ノ實物ニ徵スルヤ確緻ナリトス卽チ兩全ノ好書ニシテ、初學普通ノ津筏ト稱ス可シ是余ノ速カニ印刷播布ヲ慫慂スル所以ナリト云爾」

明治十四年十月　　錦窠老人　伊藤圭介　識

要スルニ右ノ書ハ假令一ノ小冊子ニ過ギヌトハ言ヘ正ニ植物譯語源泉ノ一書デ兎ニ角其舞臺デ一技ヲ演セシ一役者タルヲ失ハヌ、卽チ明治ノ植物學發達ノ歷史ヲ稽フル士ノ須ラク一顧スベキ書デ回顧スレバ今カラ五十年ノ前ニ旣ニ此ノ如キ出版モノヽアッタ事ヲ見逃ガシテハナラナイ